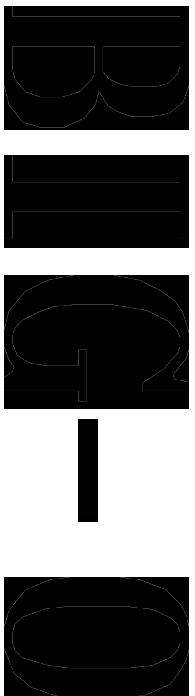


クロムガンナー



ACT:01

ロジャー・ザ・ネゴシエーター

第四稿

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

登場人物

ロジャー・スミス(25)……………ネゴシエーター

ノーマン・バーゲ(64)……………ロジャーの執事

R・ドロシー(18)……………アンドロイド

ダン・ダストン(47)……………治安維持軍

ビッグ・イヤー(49)……………デイルの店にいつもいる情報屋
デイル(38)……………安酒場店主〔台詞無し〕

ミゲル・ソルダーノ(68)……………ソルダーノ重工社主

ティモシー・ウエインライト(72)……………元科学者

ベック(22)……………誘拐犯首謀者

その部下数名

治安維持軍警察隊

検問員

アウト・オブ・ドーム

荒廃した旧都市のビル群。その中を走り抜けていく一台の車。ワックスで磨かれたメッキが、車を見つめる低所得層の虚ろな顔を映し――。

車内

大径のステアリングを握るのは、黒のスーツ、黒の革手袋、黒のサングラスをした若い男、ロジャー。「(モノ)私の名はロジャー・スミス。この記憶喪失の街には必要な仕事をしている」

市場街

ロジャーの車はやがて人寂しい、朽ちた精肉市場街へ入っていく。

市場跡

暗い構内。アタッシェを手に入ってきたロジャー。と、闇の奥から車のヘッドライトが照らされる。サングラスにその光を映し、無表情にその方へ近づいていくロジャー。

男の声「そこに置け」

ロジャー「お前がベックか。これは取引だ。違うか？ フェアな取引は、互いの札を見せ合うものだ」

車のライトを背に、小狡そうな痩せた男が立つ。ベック「(苦笑)流石はパラダイムシティのネゴシエーター、とあったところか」

ロジャー「私の仕事は交渉までだが、人質の安否は確認したい」ベック、合図をすると――後部ドアが開く。

僅かに眉を顰めてロジャー、凝視。

ヘッドライトにシルエットで浮かぶ少女のシルエット

ト。栗毛の髪は乱れ上品そうな服が汚れ、目にはア
イマスク。しかし、そう脅えてはいない様子。

その背後に立っている大柄の男――

ロジャー、アタツシエを掲げ、相手に向けて蓋を開
く。中には古い紙幣が詰まっている。

男 「Soldierノは自分の娘を値切った。そういう男さ」

ロジャー「額は合意している筈だが？」

ロジャー、サツと閉じた鞆を床に置き、グツと押す。
ちょうど中間にて止まるアタツシエ。

ロジャー「レディをこちらに向かつて歩かせろ」

ヘッドライトの向こうで、数人の男が蠢き――、少
女がこちらに向かつて歩きだした。

ロジャー「慌てないで。ゆっくりこちらに向かつて来たまえ」

小柄な男が卑屈そうに走り出し、鞆をひったくって
戻っていく。

ロジャー「もう目隠しはとっていいですよ、ミス・Soldierノ」

歩いてきた少女、目隠しをとる。

ロジャー「――？（やや怪訝）」

と、ロジャーの背後から高級セダンが走り込んでき
て止まる。

ロジャー「（振り向き）――やれやれ。堪え性の無いクライアン
トは困る」

車からヨタヨタと飛び出して来る、裕福そうな初老
の男。

Soldierノ「ドロシー！ ドロシー！」

ブオオオオン！ 野太いエクゾーストが響き、セダ
ンがいきなりバツクし、対面のドアを蹴破って出て
行った。

ロジャー「（少女に）これで、あなたは自由だ。あの父親の許で
はいささか窮屈な自由でしょうが」

少女「（じつとロジャーを見つめる）」

Soldierノは見回している。

ロジャー「取引は成立しました。報酬の半金は――」
Soldierノ「これはドロシーではない！」

ロジャー「は？」

ソルダーノ「判らんのか」こんなものが私の娘である筈がない
じゃないか！」

ロジャー「——」

少女、ロジャーを見つめ——、首をやや傾げる。

ギツ。ギアが噛む音がした。

ロジャー「——アンドロイド……（愕然）」

ソルダーノ「これはドロシーのダミーだ。そんな事も判らず金を
渡したのかあんたは」

ロジャー「——」

ソルダーノ「何がパラダイム・シティーのネゴシエーターだッ。

腰抜けのボンクラじゃないかッ」

ロジャー「——」

険しい目をサングラス越しにソルダーノに向けてい
たロジャー、革手袋の手を胸へ入れる。

ソルダーノ「（ギョッ）なっ——」

ロジャー、腕時計のリグを回し——、カチリ。

工場街

工場からやや離れた道路で——突如小爆発！
車の屋根を突き破って飛び出す黒い物。

工場前

外へ飛び出し、向こうに見える噴煙を見て——

ソルダーノ「何をした」まだ娘は帰ってきていないのだぞ」

ロジャー「フェアな取引では無かった。こちらも取り戻します」

ソルダーノ「何だと？」

工場街

煙の籠もった車内から出てくる暗黒街の男達。

ゲホゲホむせながら見上げる、首謀格のベック。

ベック「くそっ」

虚空を飛び去っていくアタツシエ（若干変形し、飛行形態となっている）。

ドガガガガ！ 手下がマシン・ピストルで撃つ。

ベック「よせっ！ 中には——」

鉛の様に低く垂れ込めた空

飛行していたロジャーのアタツシエ、被弾し——、

口が外れ——

札びらが木の葉の様にアウト・オブ・シティに散っていく——。

アウト・オブ・シティの向こう側には、巨大なドームが幾つも聳えていた。

これが、この時代の人間が住む世界——。

ロジャーの車内

不機嫌そうにサングラスを外すロジャー。

ロジャー「（モノ）交渉事には誠意というものが要だ。今回のケースでは、双方にそれが欠如していた。ネゴシエーションとは、プロとプロが交わすべきもの」

24丁目（ストリート）

アウト・オブ・シティでは最も賑やかなストリート。車を路上に止め、降りるロジャー。重装備セキユリテイ・システムを作動させ——、デイルの店へ。

デイルの店／内

典型的な安酒場（スピーキージー）。店奥にはジューク・ボックスや玉突き台。

若い演劇青年らがビールで激論をしている脇を抜け

カウンター前に来ると、店主のデイル、無言でビールの小瓶を前へ。それを手にしたロジャー、奥のいづも自分が座る席へ。

隣のテーブルでは、ユダヤ人の老人が新聞を読んでいる。

ビッグ・イヤー（情報屋）「——珍しく失敗したみたいだな」

ロジャー「（ビールを呑み）堪え性の無いクライアントだね」

ビッグ・イヤー「（笑いを殺し）令嬢は助けだしてやらないのか

ね？ 白馬の王子様」

ロジャー「——（初めて男を見て）私が依頼されたのは、金と引き換えにドロシーの居場所を聞き出すという事までだった。身柄を引き取るうというのはこちらの好意で申し出たまで。しかし——、あんな人間に近いアンドロイドを作っていたとは——」

ビッグ・イヤー「さてね……、俺が知っている事は、ソルダートは、メモリーの断片を手に入れた、という噂だけさ」
眉を上げるロジャー。

ロジャー「メモリー……」

ビッグ・イヤー「御禁制の物をソルダートの工場は作れる、という事だ。後は知らない」

ロジャー、ビールを飲み干し、立ち上がって、数枚の畳んだ金をビッグ・イヤアのテーブルに置き去る。

ロジャー車内

車外の風景はやがて徐々に人寂しいところへ。

ロジャー「（モノ）この街、パラダイム・シティは記憶喪失の街。この街の人間は、四十年前のある日を境に、それ以前の記憶を全て失っている。しかし、それでも人間というのは何とかしていくものだ」

赤灯を回しサイレンを鳴らす軍警察の装甲車両群とすれ違う。

無線機のスピーカから、ラジオノイズと共に声。

軍警察指揮官（ダストン）「（オフ）ソルダート令嬢誘拐事件の

指揮はこのダン・ダストーンが執る。犯行車両の近辺は封鎖！ 令嬢救出が至上命令だ！——（ノイズ）」

ロジャー「——（モノ）どうすれば機械が動き、電気が得られるのかさえ判れば、過去の歴史など無くとも、文化とやらは装えるものだ。過去に何があつたのか、何が無かつたのか。気にせずに生活だつて出来る。いや、そう努力してきたのだ。記憶を失って哀しんでいるのは、この街の老人だけだ。しかし——、メモリーは悪夢の様に、いきなりその姿を現す時がある——」

ロジャー邸

街からやや離れたところに建つ、銀行だったビル。ゲートが自動で開き、ロジャーの車は中へ。

同ノ一階ホール

ただ広い、銀行のフロア。

ロジャーを老いた執事が出迎える。

ノーマン「お帰りなさいませ、ロジャー様」

ロジャー「ノーマン、ブレイキの遊びが1/8インチ、甘くなつている」

ノーマン「おや、そうでしたか（呑気に）。お食事の用意の後、診ておきます。首尾がおよろしくなかつた御様子で」

ロジャー「（エレベーターに向かい）犯罪者もプロたるべきだとは思わないか？ ノーマン！」

ノーマン「ロジャー様、申し忘れましたが、ウェイナライト嬢がお待ちでございます」

ロジャー「女の客？ 通したのか」

ノーマン「はい」

ロジャー「——なるほど。ノーマンが通したと」

ネクタイの結び目を直し、姿勢を正して手動ドア式エレベータに乗るロジャー。

ロジャーの部屋

ペントハウスがロジャーの部屋。

入って来ると、テラスに少女が立ち、ビルを眺めている。

ロジャー「この屋敷へ、無条件で入れるのは女性だけというルールがあります。お待たせしました、ロジャー・スミスです。どんなお力になります——」

少女、振り向く。

ロジャー「こ、ウェインライト嬢というのは——」

R・ドロシー「——こんにちは」

ロジャー「(落胆)ノーマンも老いたな。アンドロイドを女性客と見紛うなどと」

R・ドロシー「あなただって、最初は判らなかつた」

ロジャー「(慥然)あそこは暗かつたからだ。で、何の用事かね。ソルダーノ令嬢誘拐事件は既に軍警察が大がかりな捜査をしている。じきに本物のドロシーは発見されるさ」

ネクタイを緩め、机に腰を下ろすロジャー。

ロジャー「——しかし、よく出来ている……。あの強欲なソルダ

ーノが、君の様な芸術品をよく作ったものだ」

R・ドロシー「ソルダーノはお金を出したただけだわ」

ロジャー「(苦笑)違いない。——で、用件は？」

R・ドロシー「あたしを守って欲しいの」

ロジャー「——は？……。君は私を探偵か何かだと勘違いしているのか？ いや、アンドロイドのボディガードなど、探偵の仕事ですらない」

R・ドロシー「あなたの仕事よ、ロジャー・スミス」

ロジャー「——」

と、ノックの音に振り向くロジャー。

ノーマン「ロジャー様、軍警察のダストン大佐がお目に掛かりたいと申されておりますが」

ロジャー「——」

応接室

暖炉の上の写真額を見ているダストン。

ロジャーが軍警察時代の写真。

ロジャー「(オフ)あまり他人の家の物に勝手に触らない方がいい」

ダストン「(苦笑)特にそれが、あんた自身のメモリーだとすればな」

ロジャー「(入ってきて)戦争でも始めようという勢いだつたが、当然既に令嬢は救い出したんだろうね。酒は？」

ダストン「(手で遮り渋面)それがおかしい。誘拐だという報せだつたんだが、調べたらソルダーノに娘などいない」

ロジャー「……(思案)」

ロジャー、黙って自分のグラスに酒を注ぐ。

ダストン「(見透かす様に)ま、ソルダーノも当局に報せず、勝手に犯人と交渉をしようとしたらしい。ドームの外じゃ羽振りのいい工場主だ。我々に近づかれると、色々ホコリが出てくるってところだろうが」

ロジャー「お祭り騒ぎを好まない人種はいるものだ」

ダストン「——スミス警部補」

ロジャー「(やや怒気)わざとなら厭味が過ぎるぞ。私はあなたの部下では無い。その呼び方は二度としないで欲しい」

ダストン「——すまない。昔の癖だよ。よくあるだろう？ ともあれ、パラダイム・シティーのネゴシエーターさんに、一つだけ、言いたいのが」

ロジャー「——」

ダストン「あんたがへマをした仕事だ。首を突っ込んでくれるな」

言つて部屋を出ていくダストン、振り向き——

ダストン「今度は、その酒、頂くよ。じゃ」

慥然と立ち尽くしていたロジャー——、

ロジャー「ノーマン！」

ガレージ

グオオオン！ エンジンの音がホール内に響き渡る。

球面ブラウン管にノーマンの顔が映る。

ノーマン「申し訳ありません。ブレーキ調整はする時間がございませんでした」

ロジャー「帰ってから頼む」

ドアが開き始めた。

ギアを入れるノーマン。と！

助手席のドアが開いた。

ロジャー「！」

勝手に乗り込んで来るR・ドロシー。

R・ドロシー「ソルダールノ工場へ行くんでしょ」

ロジャー「腕づくで下ろそうか？」

R・ドロシー「ただの人間がそんな力、持ってないと思うけど」

ロジャー「(ムツ)」

グオオオオン！ 踏みつけたスロットルに反応し、

爆発的なパワーを駆動系に伝えるエンジン。

走り出ていく車。

工場街

走るロジャーの車。

車内

ロジャー「大体君はソルダールノが作ったんだろ。言わば親だ。

どうして私のところへ来た」

R・ドロシー「——親……」

ロジャー「アンドロイドが作り主をどう認識しているのか、私には見当もつかないがね。しかし主人に尽くすのがアンドロイドの役目だとすれば、君は——(ハツ)」

R・ドロシー「あたしはドロシー。親なんて、あたしには——」

ロジャー、横目でドロシーを見つめる。

押し黙る二人。

やがてフロント越しに、大きな工場が見えて来る。

ソルダーノ工場敷地内

車を滑り込ませ、降り立つロジャー。

ロジャー「何かあったのか……ここで」

脇に立つR・ドロシー。

無人。工場の窓ガラスは全て割れ落ちており、内部は暗く落ちている。

ロジャー「君は知らないのか？ ドロシー」

R・ドロシー「——」

無言で先に立って歩きだすドロシー。

ロジャー「——」

工場内

薄いスモークがかかった暗い構内。

やってくるロジャーとR・ドロシー。

ロジャー「これは……」

工場の床面には、クレーターの様に巨大な穴が開き、漆黒の闇にまでその穴は連なっていた。

キツと見上げるロジャー。

制御室の割れた窓に、明かりが。

同ノ制御室

ドアを押し開けて入って来るロジャー。

ロジャー「ソルダーノ！」

倒れているソルダーノ。

駆け寄って身を起こすロジャー。

ソルダーノ「（弱々しく）あんな奴らの為に作りたくなかったんだよ……」

ロジャー「何を作ったんだ」

ソルダーノ「——おお、ドロシー2」

冷徹に見下ろしていたR・ドロシー。

ソルダールノ「(手を伸ばし)お前の方が私の本当の娘……」

R・ドロシー「この人は設計図通りに組み立てただけ。死を前にして錯乱した言葉だわ」

ロジャー「よせ! そういう言い方をするもんじゃ、ない」

ソルダールノ「そうだな(弱々しくドロシーに笑いかけ)——ナイ

チンゲール……」

ロジャー「(怪訝)何……?」

ソルダールノ、目を閉じた。もう彼の目が開かれる事はない。

ロジャー、短く黙祷し、そっと床に寝かせ、膝まづいている。

R・ドロシー「お祈りをしているの……?」

ロジャー「シッ……」

R・ドロシー「——?」

ロジャー、ゆっくりとサングラスを外し、周囲を見回す。

キリキリキリ……。極く僅かな機械音。

バシュ! 工場床側に光一閃。

ロジャー「逃げる!」

ギユウウウウウン! 地对空ミサイルが制御室の窓から飛び込んで——

ドオオオオオン!

キャットウォーク 非常階段

すんでで逃げられたロジャーとR・ドロシー。

しかし、その先はキャットウォーク。

眼下の襲撃者は次々と銃撃。

ドガガガガガ!

みるみると崩れていくキャットウォーク。

逃げる二人。

R・ドロシー「お返しとか、しないの?」

ロジャー「気楽に言うなっ。いちいち、ミサイルなんか持って歩

かないんだ、私は」

ドオオオン！　すぐ背後で爆発。
伏せる二人。

ロジャー「！」

ロジャーの視線の先には――、愛車が。

ロジャー「君一人なら、もっと早く走れるな」

R・ドロシー「あたしをオトリにしようっていうの？」

ロジャー「（ニヤ）ビンゴ」

ドン！　とR・ドロシーを押し出すロジャー。

ドガガガガ！　R・ドロシーを狙う銃弾。

必死に走るR・ドロシー。

ロジャー「よし――」

腕時計を開き、操作するロジャー。

ロジャーの車のボンネットが開き――、小型ミサイルを銃撃者の車に向けて発射！
ドオオオオン！

工場フロア

車に近づくロジャーとR・ドロシー。

R・ドロシー「あなたって、最低だわ」

ドロシーの服、ボロボロ。

ロジャー「その台詞は、人間の女に言われ慣れている」

と、車内のコールランプが明滅していた。

ロジャー「？――（マイクをとり）どうしたノーマン」

球面ブラウン管にノーマンの顔。

ノーマン「ロジャー様、西五番ドームに、巨大なロボットが現れ

ています」

ロジャー「！」

ノーマン「造幣局の建物を襲撃しておりますが、いかがなさいま

すか」

ロジャー「――決まっている。（R・ドロシーを見て）これこそ
が、私の仕事だ」

R・ドロシー「――」

西五番ドーム

巨大なドームに包まれた摩天楼の街。
アウト・オブ・ドームとは違って整った綺麗な街並。
その摩天楼の間を、巨大な影が歩く。
ドロシー1、ノーマン重工製ロボット。
軍警察が集結しつつある。

軍用車内

ダストン「（無線に）ただのロボットじゃない！ 明らかに犯罪
仕様として作られた武装ロボットだ！」
フロントガラス越しに見えて来るドロシー1。

街へ向かう道

走り抜けるロジヤーの車。
ドームが並び立つのが見える。

ロジヤー車内

R・ドロシー「――あなたの仕事、つて？」
ロジヤー「ネゴシエーター、交渉屋さ」
R・ドロシー「交渉？ それが決裂したら？」
ロジヤー「（ニヤ）こちらの要求を飲んでもらうまでだ」
車はドームのゲートに。

ドームの外の貧民層が、ドーム内の騒乱を外から見
物しようと集まっていた。
ゲートで停まった車に、軍警察の検問員が来る。

検問員「このドームは現在封鎖中だ。IDを見せなさい」

ロジヤー、窓を開けて顔を見せる。

ロジヤー「新人か。私の顔くらい、覚えておいて損はないぞ」

検問員「え？」

ロジャー「(ニツ)」

ブワン！ 車はドームの中へ走り出すと――

R・ドロシー「(オフ/小さな叫び)お父様――」

ロジャー、「ん？」と横目で見る。

ゆっくりと走る車、助手席側のウィンドウ。内側のR・ドロシーと、野次馬の先頭にいる老紳士。何かを訴えかける様な顔でドロシーを見つめている。

実際はほんの一瞬の出来事ですが……。

ロジャー「――(アクセルを踏み込む)」

検問員「待て！ ちよつと待てええ！」

摩天楼街

ドロシー1、造幣局の前へ。

エクステンション・アームを突き出し――、壁に腕をぶち入れる！

造幣局内

まるでそれ自体が生き物の様に、ドロシー1の腕がぐんぐんと伸びて内部へ。

パン パン パンッ

警備員のピストルの音が乾いた音をたてる。

摩天楼街の道

ドロシー1の目が――、光る。

キキーツ！ 軍警察が制している野次馬の中に突っ込んで急停止するロジャーの車。

数ブロック先に、屈んだドロシー1。

ロジャー「なるほど。あれがソルダ―ノが密造していた――」

R・ドロシー「ドロシー1」

ロジャー「君じゃ、役に立たない、と思った奴らの気持ちがよく判ったよ」

くおおおんんんんんん

ドロシー「まるで叫ぶかの様に音をたてた。

ロジャー「！」

ロジャー、腕時計を開く。

ロジャー「——ビッグオー！」

R・ドロシー「（眩き）止めて——、お父さま……」

造幣局内

警備員「ぎゃ ああああ」

突っ込まれたアームが大暴れ。

警備員らを一掃した後——、更に壁を突き破る！

同/前

軍用車両脇でマイクに怒鳴るダストン。

ダストン「賊が狙っているのは金じゃない！ その原板だ！ 死んでも守れ！ ただし！ 周囲のビルを決して損壊させるんじゃ——」

ズズ ズズズズ ズズズズズズ

ダストン「なっ、何だこゝ、今度は何だこゝ」

背後のビルとビルの間が陥没していく。

ダストン「ま、まさか——」

土煙の中に、その威容が見え始める。

黒き鈍色の巨体。鋼鉄の人——。

ダストン「メガデウス……、来ちまったか……（脱力）」
地下よりその姿は現したものの、未だ起動していないビッグオー。

ビッグオー/コクピット

ガチン、重いハッチを開いて入って来るロジャー。

齒科の様な椅子に座り、各部スイッチを入れていく。ブン。小さな球面ブラウン管に灯が入り——、細い線が画面いっぱいになって——、文字を映し出す。『神の名においてこれを鑄造する。』
汝ら罪なし』

ゴオオオオンンンン！ 全身に力が漲っていく。その力強さが振動となって——
ロジャー「ビッグオー、いくぞ」

摩天楼街

ガオオオツ！ 起動したビッグオー、造幣局前のドロシーに立ち向かっていく！
野次馬、無責任な歓声を贈る。

ダストーン「——（顔を覆い）火に油だ……」

造幣局／原板保管室

暗い室内——。鉛の厚い壁が——、熱線で焼き切られ——、ドロシーのエクステンション・アームの先が穴を開ける。
黄金色に輝く、紙幣の原板——。
それを掴もうとする指——
ぐっ、それが止まる。
ズルズルズル——、下がっていくエクステンション・アーム。

摩天楼街

ビッグオー、ドロシーの背後から強引な力で引きずり出していく。
ぐぐっ、ぐぐぐぐぐっ！
思わず拳に力を入れて見入るダストーン。

ダストーン「——よーし……」

エクステンション・アームまでが引つ張り出される
と――

ドオオオオン！ そのまま、背後のビルに投げ飛ばすビッグオー。

ダストン「ぐあつ！ 何て事を……」

動きが鈍かったドロシー1、エクステンション・アームの装備を、対大型ロボット仕様に換装し――、
ビッグオー目掛けて攻撃！！
ドドン ドドドドドン！

ウー ウー ウー！ サイレンがドーム内に響き渡る。

アナウンス「西五番ドームには退避命令が出ました。皆さん、慌てず、安全に避難して下さい」

ダストン「（深い嘆息）――また査問会か……。くそっ！――ん……？」

ビッグオーとドロシー1が戦っているブロックに歩いていく、少女の姿。

ダストン「何をしているんだあの子は！ おーい！ 君！」

振り向く――、R・ドロシー。ドロシー2。

ダストンを一瞥し、また前に向かって進んでいく。

ダストン「莫迦な！」

マイクを投げて駆けだすダストン。

ビッグオーノコクピット

手足をフルに動かし、自らの器官の延長の様にビッグオーを操るロジャー。

パンチの連続で追い詰めていく。

ロジャー「（ニヤ）ようし……、いい子にきなさい。ドロシー」

と！ エクステンション・アームがまたも変化！

ロジャー「何ッ？」

摩天楼街

あまりにも卑怯な手段でビッグオーを締め上げるドロシー1。
ビッグオーの巨体が、宙に浮かんでいく。
見上げていたR・ドロシー——ガクンガクンと痙攣し——、ドロシー1と同じ動作をしている。

ビッグオー/コクピット

ロジャー「——（ニヤ）あくまで駄々をこねるんだね、お嬢さん」
右腕のアームを、グーツ！ と伸ばし——、振り上げる！ 軋むジョイント！

摩天楼街

ビッグオーの腕が——、振り上げられ——、パイル・アーム部がスライド！

ビッグオー/コクピット

ロジャー「バイバイ、ドロシー1」

摩天楼街

ドガアアアアン！ パイル・アームが火を吹き、ドロシー1の背部から胸を貫いた！
動きが止まりかかるドロシー1、片腕を空に掲げ。

R・ドロシー「（涙が一瞬見える）ドロシー1……」

R・ドロシーもまた、片腕を空に上げてユラユラと立っている。

駆けて来るダストン。

ダストン「何をしてるんだ」

ビッグオーノコクピット

その声にスリットから下を見るロジャー。

ロジャー「ドロシー」何でこんな近くに」

空に掲げたドロシーの手を、。

と！ ダストンが駆けつけてきて

摩天楼街

ダストン「危ない！」

ドロシーの躰を抱えて走ろうとし——、その重さに
よるける。

ビッグオーノコクピット

ロジャー「早くそこから離れる」(ハッ!)」

スリットの向こうでは、倒れ始めるドロシー！。

摩天楼街

ダストン「！」

ドオオオオオオン

破するドロシー！。

続く